
御倅事

柳戸 綾香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御尽事

【Nコード】

N1664B

【作者名】

柳戸 綾香

【あらすじ】

どしゃ降りの雨の中、出会った二人のお話。恋でも愛でもない。でも、誰よりも貴方が大切だった・・・

信じるという気持ちを持ち続ける難しさに

僕等はいつ気付いたのだろう

分かち合うぬくもりやら

繋いだ手の不確かさに

どうして背を向けるのだろう

僕等が出会っただろう数え切れない不条理に

真実などあるとは思えなくて

こっやって只、息をして生きている事に

意味など

求めるのが間違っているでしょう？

僕等が捜し求めた“本当の幸せ”なんて

どこにも見つかるはずもなく

汚れた足引きずっては

夢みたいな戯れ事など並べて

そう“おままごと”の様・・・

『御倅事』

私と雫の話しようと思う。

何しろ色々ありすぎて、上手く話せるかどうか分からないけれど。

私たちは、友達とも兄弟とも恋人とも言えない。

そう、言葉じゃ足りなくて。

只、雫は私を必要としてくれた様だし、

私には雫が必要だった。

雫の望みを叶えようと思い立って、
私は今、夕飯の仕度をしている。

サラサラ　サラサラ・・・

私はサラリーマンの父と、明るく世話好きの母に育てられた、何処にでもいる普通の学生だ。

私の家は堤防のすぐ側にあつて、緩やかな河の流れと、夕日に浮かぶ小さな富士山がとても綺麗に見えた。

父は帰りが遅いし、母はパートで日が暮れた後に帰ってくるので、その夕暮れの絵画みたいな窓は私だけのモノだった。

その日は雨が降っていて、私は机に向かってレポートを書いていた。

・・・

不意に鳴り響いた着信音に視線を上げる。

色とりどりに光るディスプレイには“お母さん”の文字。

「もしもし」

『あ、美月？お母さんだけど。』

少し弾んだ母の声に、私は思わず苦笑して言った。

「うん。どうしたの？」

『今日ね、お友達とご飯食べに行ってもいいかな？』

私は（やっぱりね）という言葉を飲み込んで、

「行つてきなよ。私は適当に食べるから。」

と返した。

母は冷蔵庫にレトルトのハンバーグがあるからとだけ告げて、いそいそと電話を切った。

最近、母は“お友達”とよくご飯を食べに行く。

父が帰ってくる前には帰ってるし、父の夕飯だけは作ったりしているから、父は母が“お友達”とご飯を食べてるなんて思っても無い

だろう。

それに、私はその事について父にも母にも何も言わないし、これからも言うつもりはない。

母はそれをわかってるんだろう。

何も言わないけど、最近少し綺麗になった母親に何も感じない筈が無い。

朝と夜の数分しか母の顔を見ず、しかもその殆どを新聞とテレビに集中している父よりは母の事をわかってるつもりだ。

だからと言って、母を問い詰めたりしないのは、仕事人間で休日もほとんど家にいない父に、母が何年も寂しい思いをしてきたのを知っているから。私は机の上に携帯を置くと、窓の外に視線を向けた。結露で曇った窓ガラスを手でこする。

河の流れはいつもより水量を増し、灰色のうねりと白い飛沫をたてていた。

雨足は強まっているようだった。

見下ろした堤防に人影があるのに、私はしばらくしてから気がついた。

部屋はマンションの5階だから、その表情まではわからない。

わかるのは、その人は男性で、10月の冷たい雨の中、傘もさしていない事。

男はじつと、いつも富士山が見える辺りを見つめているようだった。「変な人。」

私がそう呟くのとほぼ同時に、男がガクリと地面に倒れ込んだ。

「え?...ちよっ...」

私は慌てて上着を羽織ると、携帯をポケットに突っ込んだ。

玄関に向かいかけて一度引き返し、バスタオルを引っ張り出して家を飛び出した。

男は地面に座り込んでいた。

「あのっ...大丈夫ですか？」

私の声に、男はうなだれていた顔を上げた。

ポタポタと雨粒を滴らせた前髪の向こうの顔は物凄い青ざめていて、唇が小刻みに震えていた。童顔の丸い目が私を見た。そして首をひねる。

「キミは…。」

顔で想像したより低い声にドキリとして、一瞬言葉に詰まる。

「え…と…」

何で私、慌てて飛び出して来たんだっけ？って疑問が頭をよぎった。まったく知らない人だ。

いつもだったなら目の前で倒れたって無視するかもしれないのに。

「倒れたのが見えたから…。」

私はそれだけ言って傘をさし出した。バスタオルをそつとその頭に被せる。

「ありがとう…。」

男はニコリと人懐っこそうに笑った。

男は随分と若く見えた。

高校生は言い過ぎかもしれないけど、大学4年の私よりは下に見える。

「僕はキミを知ってるよ。」

男が突然そう言った。

私はびっくりして男を見た。

男も私を見ていた。

「いつも同じ夕日を見てる。」

男はそう続けた。

「え？」

私の問い掛けに返事は無かった。

男がフラリと地面に倒れかけて、私は慌てて手を差し延べた。地面に膝をついてなんとか引き上げる。

私の体にすっかり体を預けてグッタリした男に問い掛ける。

「救急車、呼ぶ？」

男は小さく頷いた。

震える男の体を支えながら、ポケットの携帯を引っ張り出して電話をかけた。

救急車は程なくやってきて、タンカに乗せられた男は行ってしまった。

私は、冷え切った男の身体の感触と重さを思い出していた。

人間にまともに触れたのなんて久しぶりだな…

なんて思いながら、遠ざかっていくサイレンの音を聞いた。

雨は小降りになって、雲の切れ間から光の帯が降りて来ていた。

これが、雫との出会い。

次に会ったのは、一週間後の事だった。

その日も夕日が綺麗で、川も建物も堤防もオレンジ色に染まって見えた。

そう、それはいつもの風景だった。

当たり前すぎて、今まで気付かなかった。

橙色の景色の中に溶け込むように、彼はそこにいた。

あの日と同じように、富士山をじっと見つめているようだった。

オレンジに輝く黒髪が綺麗で、思わず見とれていたなら、彼はフツと

こちらを見上げた。

目が合った気がしてギクリとする。

彼は手に持っていた何かをこちらに掲げて見せた。

見覚えのある…

「あ、バスタオル？」

私は“そっちに行く”とジェスチャーして、窓辺を離れた。

堤防はオレンジ色に揺れていた。

少し風が強い。

彼は私が堤防をのぼりきるのを嬉しそうに眺めていた。

「久しぶり。」

彼は言った。

私が小さく頷くと彼は紙袋を差し出した。

黙って受け取ると、彼は面白そうに私の顔を見た。

「この前はありがとう。助かった。」

穏やかな声。

私は首を横に振った。

「僕は雫。更木 雫。」

私はその言葉に顔を上げて彼を見た。

この前ほど蛾人形じみた青白さではないけれど、やっぱり顔色が悪い。

「君は？」

彼が聞いた。

「水沢 美月。」

私が答えると、雫は嬉しそうに微笑んだ。

その顔を見上げる。

雫は思っていたよりずっと背が高かった。

「今日はもう戻らなきゃ。」

雫はそう言った。

私が黙っていると、雫はニコリと微笑んで、

「また明日。」

と言った。

「うん。」

私が頷くと、雫は満足したようすで、くるりと背を向けて歩き出した。その背中をじつと見つめた。

見えなくなった頃、空には夜の色が混じって、まだ白い月が控え目に浮かんでいた。

家に帰って紙袋を開いたら、洗剤のいい香りのするバスタオルと、小さな紙切れが出て来た。紙には携帯の番号。

「新手のナンパ?!」

私は何となく腹が立って、その紙をごみ箱に投げ捨てかけた。丸めようとしたその裏面にメールアドレスが書いてあるのが見えて、その丸文字になぜか笑ってしまった。

そして私は、その紙をそつと机の中にしまい込んだのだ。

次の日、私は家路を急いでいた。

空は薄紅色に染まりかけていて、青空との境目に光の帯が輝いていた。

別に約束したわけじゃないのに、どうしてこんなに急いでるのが自分でもわからなかった。

ただ、橙色の堤防に彼がいるのを確かめたくなくなってしまったのだ。

やっと、あの窓辺にたどり着いた時、太陽はすっかりビルの向こう側に沈んでしまっていた。

空はまだ橙色で、ゆつくりと紫色が混じっていく最中だった。

息を切らして覗いた先の堤防に、雫はいた。

もう歩き出したところで、私は何故か慌てて携帯を引っ張り出して、いた。

机の中からあの紙を取り出すと、

『もう帰るの?』

つてメールを送った。

“送信完了”というメッセージが映し出されたところで、自分がバカみたいだと思った。

堤防をゆつくり歩いていた雫は、ポケットから携帯を取り出して、そして振り返った。

『おかえり。話してくれるなら待つてるよ。』

メールが返って来て、私はもう一度雫を見た。

『行くから待つて。』

私はそう返して家を出た。

「美月ちゃんも変わってるね。」

雫はそう言った。

堤防に二人で座って開口一番。

「自分でもどうしちゃったのかわからないわ。」

私が答えると、雫は嬉しそうに笑った。

「雫…くんは…どっか悪いの？」

雫は少しこちらを見た。

「“くん”はいらないよ。」

「じゃあ“ちゃん”もいらないよ。」

雫は頷いてちよつと考えた後に言った。

「体弱くて、もう長くないかも。」

「そっか。」

私の返答に雫は吹き出した。

「あっさりしてるなあ。」

そう言つて、クスクスと笑った。

よく笑う人だな、と思った。

「だって人間、死ぬ時は死ぬでしょ？」

私が言くと、雫は私を見た。

私は雫が何か言う前に続けた。

「生きてるほうが難しいじゃない？10分後に車に轢かれたって、それは珍しい事でも何でもなくて。だから、その時までどうやって生きるのかが大切だし、生まれて来たんだから短くても楽しく暮らす権利はあるし。短いってわかつてるなら色々楽しまなきゃ損だわ。」

雫は私の目をじっと見ながら黙って聞いていた。

そして呟いた。

「ネガティブなのかポジティブなのかわかんないよ、それ。」

私は苦笑した。

「色々あったからねえ。」

雫はそれを聞いて目を細めた。

「美月って…いくつ？」

あんまり真剣に言うので、私は膨れて見せた。

「どうせ、思考がおばさんじみてる22才ですよっ。」

それを聞いた雫は驚いた顔をした。

「なんだ、2つも年下じゃん。」

それを聞いて私も驚いた。

その驚きの空気を引きずりながら、雫の話を聞いた。

入退院を繰り返してる事。

両親が過保護な事。

好きな本や音楽や色々を、雫は目をキラキラさせて話した。

雫の話は面白かったし、物凄く引き付ける何かがあった。

それが命の輝きが人よりすこし強いからだという事に気付いたのは
もつとずいぶん先の事だ。

短い命を誰かの心に焼き付けて、忘れないように。

私と雫には似ているところがあった。

人間に少しの不信感を抱いている事も、どうしようもないマイペー
スも。

少しお金に余裕のある親に育てられた（質は違うけれど）ある種の
甘い考えや、そういう物の見方や。

雫は生きる死ぬに敏感で、私が体験して思い知った近しい人の死に
よる失望感や喪失感よりも、もつと奥の奥まで突き詰めた、死とい
う状態に至るまでの色々やその後の事までを、その胸の内に秘めて
いるようだった。

そして、その端のほんの一部を時々、私に見せてくれたりした。

私たちは約束をするでもなく、そこで会うようになった。

夕焼けが綺麗な日。

それが暗黙のルールだった。

私は毎日あの窓から堤防を見下ろしていた。

また、あの日みたいに雨の中、一人で立ち尽くしてたら…と思った
けれど、そんな事は二度となかった。

「僕さ、美月になりたい。」

その日、雫は突然そんな事を言い出した。

「何それ。」

私が言うと、雫は悪戯っぽくにこーっと笑って言った。

「僕が死んだらさ、骨を味噌汁かなんかに入れて食べてほしいな。

それで、美月の一部になる。」

雫のそういう突拍子もない言動に、私はすっかり慣れてしまっていた。

「馬鹿ね。」

私が言うと雫は膨れて、

「だってさ、冷たい土の下で死んでからも親の小言聞き続けるよりはずっと居心地良さそうだし。」

と言った。

私は思わず笑ってしまった。

「食べたなら消化されて外に出ちゃうじゃない。」

私の言葉に雫は嬉しそうに笑った。

「汚いなあ。でも、食べるのは否定しないんだ。」

「別に嫌じゃないもの。」

キツパリと言った私に、雫は小指を差し出した。

「じゃあ約束。」

言ったその小指に指を絡めた。

「変な約束……。」

私の呟きに雫は上機嫌で、鼻歌でも歌い出しそうだった。

私は絡んだ雫の指に魅入っていた。

細くて白くて華奢で、でも大きな手。

儚いくせに強い、雫そのものだった。

家に帰った後によく考えたら、他人が聞いたら物凄いスプラッタな話だなと思った。

でも、雫の気持ちはなんとなくわかった。

冷たい土の下で、もしかしたら一人ぼっちかもしれない。

それは、とても恐ろしい事のような気がした。

それに、あまり両親と折り合いがついてないのもあるんだろうと思った。

雫は両親とあまり仲がよくない。

「過保護でうざい」とよく漏らしていたし、実際、ちょっとキチガイじみた可愛がり方をしているので、うちの親の放任主義と足して2で割ってほしいくらいだった。

それが、雫の体が弱い事と、雫自身にその自覚があまりにも足りなすぎる所にあるのもわかっていたので、私はどちらも正しいと思っていた。

雫の両親は雫が大切に大切に。

だから、雫が私を友人だと紹介した時、二人は涙を流した。

後で聞いたら、雫が友達を連れてくるなんて後にも先にも私だけだったらしい。

その頃、私は時々雫の家で夕飯をごちそうになったりしていた。

いつの間にそんな風になったのか覚えていないけれど、二人は私を本当の娘みたいに可愛がってくれていた。

そうやってこの親子の間に立って、気持ちのすれ違いはあっても雫だって両親が好きな事も何となくわかっていた。

だから、そう、夫婦の仲を取り持つ緩衝材の犬みたいにそこにいるのが、じつは結構気に入っていた。

その夜、めずらしく早く帰って来た父とちょっと青ざめた母に呼ばれて、もう何年も揃わなかった食卓に3人で座った。

“ ついにきたな ”

と私は思っていた。

二人とも黙っていて喋り出さないの、私から口を開く事にした。

「この家はどうするの？」

その言葉に、二人は私の顔を見て目を白黒させた。

「頭のいい娘に育ったな。」

父は呟くように言った。

私の声を聞いたのだって久しぶりでしょ、とは言わなかった。

別に話す事もなかったし、どうでもいい事だ。

「私は何だつて構わないよ。ただ、この家を出たくないし、大学院も行きたい。」

私が言うと、母は俯いた顔を更に曇らせた。

それでおかたの予想はついた。

「父さんはこのまま此処に住むから、此処にいたらいい。」

父が言った。

「うん。」

私は頷いた。

両親の離婚に対してのショックはまったく無かった。

この家のあの窓を失わなくてもいいというだけで、私は満足だった。大体がもう何年も前から書類上夫婦なだけだった二人が、いつ別れてもおかしくないと、とつくに覚悟くらい出来ていた。

「ごめんね、美月。」

母が言った。

「一緒にいてもいなくても、私の父さん母さんは二人なんだから私は大丈夫だよ。父さんと母さんが一番しっくりくるようにしたらいいよ。」

私の言葉に母は涙を流した。

父は私をめずらしいものを見るような目で見ていた。

結局、その次の日に両親は離婚した。

父はますます帰ってこなくなったけれど、お金だけは沢山あった。

冷蔵庫に貼付けてあるホワイトボードで、重要な事だけ話した。

顔を合わせる事はほとんどなくて、たまに休みの日に家にいると逆に気まずかったりした。

別に今までとあまり変わりのない毎日だった。

けれど、雫にそれを話したら

「それがずっと続いてて、よくグレなかったね。」
と言われた。

そういう時期がなかったわけじゃない。

無免のバイクの後ろに乗って、派手なメイクで、毎日違う誰かと寝ては金を貰っていた。

全然金に困ってはいなかったし、楽しくもなかったけれど、そうしていれば一人じゃなかった。

その孤独の癒し方が間違っていると教えてくれた男は、二年前に死んだ。

HIVだった。

彼は一切、私に手を出さなかった。
触れるのさえも躊躇って。

その頃の私には、それが納得出来なかった。

肌を重ねている時だけ、生きていると実感出来たから。
それが彼の優しさだと、それが私への愛情だったのだと知った時には、彼はもう死んでしまっていた。

あの男は人生の最後に、こんな小娘一人を更生させる為に心を砕いたのだ。

そして彼の家族は、その期間、彼が毎日幸せそうで楽しそうだったと言った。

それが、彼の彼なりの人生だった。

彼の人生の最後に、私は何をしてあげられただろう。

それから私は毎日学校に行って、大学も卒業する。

そして、大学院にまで行くつもりでいる。

その事実が、彼が私に遺してくれたすべてだった。

雫は黙ってその話を聞いていた。

「好きだった？」

一呼吸おいた後、雫は私に聞いた。

「生きてた時は嫌いだった。でも、今は感謝してる。」

私が言うと、雫は難しい顔をして呟いた。

「僕は美月に何が遺せるかな．．．」

「ん、驚きは一杯もらったわ。」

言うと、雫は私を見て悪戯っぽく笑った。

その笑顔が大好きだった。

子供みたいに純粹で、汚れが無くて、けど何処か淋しそうな目で、そんな事をボーッと考えていたら、突然視界が塞がれた。

「な．．．」

”何？”って聞こうとして、遮られた。

一瞬の柔らかな感触の後、視界が開けた。

隣を見たら雫がそこに元通りに座っていた。

耳まで真っ赤で、そっぽを向いて。

「雫が照れてどうすんのよ。」

言ったら、

「うつさい。」

って余計に赤くなった。

「初めてを遺してみた．．．。」

雫が物凄く小さな声でそう言った。

「覚えとく。」

私が言うと、雫はちよつとこっちを見て嬉しそうに笑った。

それが、最初で最後のキス。

今思えば、ちよつと妬いてくれたのかなって。

想像の域を脱しないけれど。

そういう毎日だった。

雫は時々体調を崩して来なかったりしたけれど、何日かするとケロツとして現れた。

来なかったら心配して、来たら少し嬉しくて。

そうやって毎日が、ただ平和に過ぎていく夢を見ていた。

だからその日、雫が来なくても“また倒れたのかな”くらいにしか思わなかった。

次の日、携帯が鳴った。

街はもうすぐ訪れる神様と呼ばれる人の誕生日を祝おうと、無機質な光の螺旋で彩られていた。

もし、本当に神が存在するのなら、こうしてこの時を私に与える意味を教えてほしい。

病院に向かいながらそんな事を考えていたら、いつの間にか“どうして私は生きているのか”みたいな哲学な事まで考えてしまって、馬鹿らしくなってやめた。

そういえば、雫に聞いたことがあった。

「雫っていつから私の事知ってたの？」

雫はあの悪戯っぽい笑顔を私に向けた。

「はじめて話した日の一月前くらいかな。いつも散歩がてら夕日ばかり見てたから気付かなかっただけだ。なんでか振り返ったら美月が夕日見てて。」

「へえ、私、全然知らなかった。」

私が言うと、雫は何か思い出すように視線を遠くにやった。

「あの日、はじめて話した日さ、何してたの？」

私が聞くと雫は、

「どうしても美月の顔が見たくなって・・・病院抜け出したんだよね。」

と答えた。

「何それ。」

呆れた。

入院してたのに、傘もささないで雨の中歩いて来たわけだ。そりゃあの蠟人形じみた顔色にもなるだろう。

「あの頃さ、なんか生きるのに疲れちゃってて。理由が欲しかったんだ。毎日、美月はいてくれたから。だから、美月の顔を明日も見る為に生きようって、そう思ってた。」

雫はそこで間をおいた。

そして自嘲的に笑った。

「あの日も此処に来て、でも雨だったから美月がいなくて、なんか気が抜けて倒れた。」

「それを私が見つけたね。」

私の言葉に、雫は笑って頷いた。

なんだか嬉しかった。

そしてあの時、雫に気付かせてくれた偶然に感謝した。

だってあの時、私が雫を見つけないければ、こうして二人で夕暮れの中で言葉を交わすことも無かったかもしれないのだから。

そんなふうに、過去の色々を思い出していた。

縁起でもないと思ったけれど、心の何処かで覚悟はしていたんだと思う。

私が病院に着いた時、雫は沢山の管に繋がれていた。

雫の母親はすでに泣き崩れていて、青ざめた父親が私を病室に招き入れた。

心電図の音が耳障りだった。

私は雫がまだ生きていた事が嬉しかった。

ドラマでよくある“病院に着いたらもう白い布が被さっていた”状態ではなかったから。

ちゃんと、サヨナラとありがとうを言えそうだったから。

私はゆっくり雫に近付いた。

「雫。」

呼んでみたけれど、反応は期待していなかった。

雫の両親の顔を見て、もうそういう場面なのだと理解していた。

「ありがとう、雫。おやすみ。あの空で、私を待ってて。」

声が掠れた。

黒くて綺麗なその髪に指を通す。

雫の温もりが指先に伝わって来て、まだ生きていると主張してるみ

たいたった。

私は、そつと髪から指を離すと病室を出た。

廊下の椅子に座って目を閉じる。

雫の顔や、温もりや、触れた髪の感触を魂に刻み付けて。

忘れないように。

橙色に輝くあの場所で、風に揺れる雫の髪を。

穏やかな声と、幼い笑顔を。

どれくらい時間が経ったのか、病室から雫と両親が出て来た。

雫の顔には、白い布が被せてあった。

私は動けず、立ち上がりもしないまま、雫を見送った。

窓の外は土砂降りの雨。

雫に会った、あの日と同じ。

お通夜とか葬式とかって、どうしてこんなに慌ただしく過ぎ去っていくんだろ。

私は雫の父親に頼まれて、すっかり気力が無くなって抜け殻みたいになってしまった雫の母親の側にいた。

父親はバタバタと忙しく動き回り、全てが終わった後、助かったと言ってくれた。

私は何もしていけないけれど。

何も出来なかったけれど。

雫は遺書を遺していた。

そこには、両親への感謝と、それから私に分骨してほしいと書いてあった。

雫の両親は、雫の最後の願いだからと快くそれを受け入れて、雫の

骨を少し分けていただいた。

小さな骨壺を手渡された時、雫がどういっつもりでそんな遺書を遺したのか、よくわからなかった。

5日ぶりに家へ帰ると、やはり父は家にいなかった。

台所のテーブルの上に、“おかえり”とだけ書いてあるメモが置いてあった。

ホワイトボードには“父 出張”。

私はなんだかおかしくて、少し笑った。

そして、あの窓のある私の部屋に入った。

5日ぶりの部屋は少し、埃っぽいニオイがした。

窓のすぐ横にある机の上に、雫を置く。

振り返ると、空は驚くほど鮮やかな夕焼けだった。

ふと視線を下ろした堤防に、その姿が見つからなくて。

そう思った途端に視界が歪んだ。

ポタリと雫れ落ちる。

一粒零れたら、後から後から溢れ出て止まらなくなってしまつて、

その場に座り込んだ。

声を上げて泣くなんて、本当に久しぶりだった。

その時はじめて、はつきりと雫がもう戻って来ない事を理解したんだと思う。

そしてもう一つ。

気付いたのだ。

私は雫を愛していた。

あんまり自然にそこにいたから、気付かなかった。

そして、思い出した。

雫と指切りをした、二人だけの秘密の約束。

私と雫の話はこれでオシマイ。

何しろ色々ありすぎて、上手く話せたかどうか分からないけれど。
私たちは、友達とも兄弟とも恋人とも言えない。

そう、言葉じゃ足りなくて。

只、雫は私を必要としてくれた様だし、
私には雫が必要だった。

雫の望みを叶えようと思い立って、
私は今、夕飯の仕度をしている。

サラサラ　サラサラ・・・

【終】

（後書き）

ここまで読んでくださって、本当にありがとうございます。
これが完結まで書けた初作品なので、拙くてなんだか申し訳ないで
す。

もしよろしければ、批評なぞいただければと思います。
直したほうがいい点など、勉強させていただきたいです。
最後に、もう一度お礼を。

ここまでお付き合いいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1664b/>

御保重

2011年1月19日07時07分発行